

## 「国使」をめぐる二・三の問題

関 幸彦

はじめに

国衙に関する研究、就中、国衙機構についてのそれが戦後精力的に開拓が進められてきた分野であることは、いまさら多言を要しまい。古代地方行政の拠点としての国衙が種々の側面で中世社会に重大な刻印を付与したとの認識も、近年の国衙論の諸成果として定着しつつあるようである。小稿の課題はかかる研究状況を踏えて、平安後期における国衙の機構・機能面での諸特質を模索しようとするところにある。この課題に接近するための基礎作業として従来ともすれば等閑に付せられがちであった国使を取り上げることにした。

従来この国使については郡司制あるいは在庁官人制との関連から泉谷康夫、高田実、米田雄介、菅田慶信の諸氏が、また国衙在庁所（＝検田所・収納所）との関連で大石直正氏がそれぞれふれておられる。さらにこれらとは別に入間田宣夫氏が王朝国家期における百姓支配とのかかわりでこの国使に論及されている。論者によって多少のニュアンスの差はあるが、そこに共通する視座とは国使を以って十世紀以降、本格的な展開を示す国衙機構再編のた

めの権力装置としてこれを位置づけようとする方向である。かかる理解に示された視角自体、有効なものとして小稿においても継承されるべきものであろう。が、ひとたび視角を転じて国使自体が如何なる形態を以って国衙地方行政に関与していたのか、またし得たのかという一見自明ともいえる問いを発したとき、そこには首肯するに足る充分な解答がいまだに用意されていないことに改めて気付くのである。おそらく、それは国使そのものの多様な存在形態に規定され、その性格上の変遷を実態に即して把握させることを困難にしているという事情があることは否定できないだろう。

もとより、国使の活動は勸農・収取・検断と地方政治の諸方面に及び、その存在も所謂王朝国家期を含む長期に亘るものである。その意味では时期的にも地域的にも国使の在り方は一様ではなかったはずである。小稿でかかる国使の足跡を史料に即してトレースしようとする理由もまたここにある。問題設定の狭量さから多分に制度的考察に終わる面もあるが国使研究を深化させるための一道程としてこうした基礎的作業も必要であらう。

(一)

『国使トハ、国政ヲ朝廷ニ奏センガ為ニ発スル使人ヲ云ヘレド、亦其国内ノ政務ヲ検セシムル為ニ、国司ヨリ特ニ官人ヲ差遣シテ、一区画ノ地ニ臨マシムルヲモ云ヘリ、即チ前者ヲバ国使入京ト云ヒ、後者ヲバ国使入部ト称セリ（後略）』

右の「古事類苑」<sup>4)</sup>の記述を参看するまでもなく、およそ国使には対中央関係におけるリンクとしてのそれと、国司の部内支配のための使者の両方を指称する場合があったことは周知の如くである。勿論、ここで問題にするの

は、国司（国衙）の在地支配における具体的な権力発動主体としての後者の如き国使についてであり、対中央ルートとの関連で見い出される四度使等に代表されるものは除外する。

ところで、この国使の存在自体は令制下においても確認できるが、それが在地諸関係史料に頻出するようになるのは、十世紀以降のことである。そこで本節では、国使体制下での国衙機構の諸特質を解明する導入として、まず国使一般の属性を史料に即して検討しておきたい。

「平安遺文」中、管見の限りで国使の名辞が出てくる例は、およそ一八〇点前後を数えるが、これらの事例を大別すると、④検田、検注及び立券に関するもの、⑤国役、雑事等の勘責及びその停止に関するもの、⑥刀称等とともに日記、公驗の保証行為にかかわっているもの、ということになる。このうち最も多い事例が④のケースである。

「相<sub>ニ</sub>副<sub>レ</sub>於<sub>二</sub>国使、郡司、図師<sub>一</sub>、相共可<sub>レ</sub>相<sub>ニ</sub>糾<sub>二</sub>糾<sub>一</sub>四至<sub>二</sub>之<sub>一</sub>状」（嘉保3・5・12、美濃国司庁宣案）あるいは「国使検田使、郡司、古老等、相共相糾之間、阡陌不<sub>レ</sub>誤、公田不<sub>レ</sub>交」（永延1・12・9、筑前国筥崎宮塔院牒）などの文

言に見られる如き、四至の画定乃至は係争地での臨検行為などがそれである。また延久元年（一〇六九）八月二九

日付筑前国嘉麻郡司解案に見る荒熟目録の作製及び見作田・新開田の田数注進なども④の場合に含められる。次に

⑤の事例では、その多くが「国使勘責甚<sub>ニ</sub>以無<sub>ニ</sub>為<sub>一</sub>方<sub>二</sub>」（天喜3、丹波国後河荘田堵等解）、「国使頻罷入、可<sub>レ</sub>出<sub>二</sub>国役<sub>一</sub>申文之由連日也」（天喜6・3・29、伊賀国玉瀧杣司等解）とある文言などからも明らかなように、国使の非法、入勘停止を本所に訴える荘民の解文中に散見する。前者の例は国使判官代為奈部兼安が刀称、郷司とともに従

類を率い、山野に乱入し、「国宣鴨頭花紙伍拾枚」を勘責したことに対する後河荘田堵等の訴状に見る文言であり、

後者は東大寺領伊賀国鞆田、湯船両郷の新開荒野における国使の国役追徴停止を本家に訴えた杣司等の解に引用されているものである。この他、荘園領主側の要請で国使入勘停止を留守所に命じた庁宣にも、多く見い出される。

莊園領有をめぐる展開され、公帰属問題の多くは、領主側にとって非法と意識された国使の叙上の如き行為によって惹起される場合も多かったであろう。殊にかかる事例が十一世紀以降、集中的に検出し得る点は留意すべきであろう。その背景には、従来単なる不輸租田として田地の集積体を意味した莊園が該時期には質・量ともに変貌しつつあったという事情が伏在すること、換言すればかかる国使を通じて表現される国衙・莊園領主双方の相剋とは、莊園が不入性を獲得し、領域的規模を有する莊園へと移行する過程で必然的に生起する現象でもあったといえる。その意味では国使の存在（動向）が莊園における領域性を規定するひきがねとして作用したであろうことも見逃せない。次に事例は少ないが◎の場合では、長保二年（一〇〇〇）三月二日の検非違使別当宣をあげることができ、「故 皇太后宮御領大和国野辺園屋一宇、納稻相共、去年閏三月十日夜焼亡、爰国使并在地郡司刀称立三日記之處」とあることから推察されるように、国使が郡司、刀称ともに家宅焼亡による公驗焼失にさいし、保証者として現われていること。また、元永元年（一一一〇）伊賀国名張郡々司等勘注に引く興福寺所進文書にもこれと同様の事例が窺える。<sup>(11)</sup>

以上、史料中の諸例にもとづき国使の在り方を簡単にふれてきたが、問題はかかる国使に任用されている具体的実体如何という点である。因に従来、国使を問題とする場合、十世紀以降頻出する検田、収納等の諸使を含めて、旧来の郡衙（郡司）の権限否定のための国衙側による郡司包摂機能の代行者的存在としてこれを理解する方向が一般的であった。それは国使を以って国衙再編の具体的執行吏として把握せんとする視角ともいえるが、その際、考慮されるべきは旧稿<sup>(13)</sup>でも言及した如く、国使と在庁官人の関係をどのように考えるかという点であろう。そこでこの問題を検討するにあたり、「平安遺文」中、国使として署判しているものを参考までに掲示すると付表のようになる。

表中でまず気付く点は、署判においてその姓名が判明するものという基準から当然のことではあるが、ほとんど

の場合が検注状乃至は立券文であるということである。これは前述した国使の④のケースに該当する。しかも十一世紀以降の例が多く、領域型荘園の増大する傾向を予想させる点で、先にふれたこととも関連しよう。ただし表中 № 1・2 に見る「大和国使牒」は他例の如く立券文や検注状ではなかったこと。及び位署した国使名を通覧するに判官代あるいは惣判官代に代表されうるような所謂在庁官人ではなかったことの二点で他とは異なるものであった。いま、これを在庁官人として署判の明白な遠江国侶質荘立券文案（№ 9）を例として考えてみよう。

——（前略）仍任彼<sub>ニ</sub>寄文并公驗旨<sub>一</sub>、使者<sub>ニ</sub>国使<sub>下</sub>司<sub>相</sub>共、

検<sub>ニ</sub>注四至内田畠小野在家等<sub>一</sub>、立券言上如<sub>レ</sub>件、以解（傍点筆者）

大治四年三月廿八日

下司

散位 藤原 在判

在庁官人

大判官代林 在判

介散位 源 在判

御使

公文主計官人代安部久宗

ここで署判の部分には国使とは記されていないが文中傍点を付した個所がそれぞれ署判の御使、在庁官人、下司に対応することは明らかであり、国使<sub>ニ</sub>在庁官人<sub>と</sub>考えられる。ただここに見る国使<sub>ニ</sub>在庁官人<sub>のうち</sub>「大判官代林」はよいとしても「介散位源」を如何に解するかである。所謂、雑任国司の在庁化とよばれる現象が十一世紀以

表 I

No.	年 月 日	西暦	文 書 名	国 使 名	国名	遺文
1	正暦 2. 3.12	991	大和国使牒	使 大掾五百井「一蔭」 東市正藤原(草名)	大和	347
2	正暦 2. 3.14	991	大和国使牒	使 大掾五百井「一蔭」 東市正藤原(草名)	大和	350
3	延久 1. 5.29	1069	筑前国嘉麻郡司解案	国使 書生判官代直 在判 目代得業生橋 在判	筑前	1039
4	承保 3. 3.27	1076	美濃国安八郡司解案	国使 大判官宮道朝臣 在判 介各務宿弥 在判	美濃	1130
5	嘉承 3. 6.24	1108	美濃国安八郡司等解案	国使 大判官代尾張 在判	美濃	1689
6	天治 1.10	1124	東大寺領美濃国 菟部莊堺檢注状	国使 大判官代藤原「盛通」	美濃	2021
7	大治 3. 4. 2	1128	紀伊国石手莊立券案	国使 惣大判官代散位中臣 朝臣	紀伊	2116
8	大治 4. 3.28	1129	遠江国質侶牧在家帳 案	介散位源	遠江	4981
9	大治 4. 3.28	1129	遠江国質侶莊立券文 案	在判官人 大判官代林 在判 介散位源 在判	遠江	2129
10	大治 4.11.21	1129	紀伊国石手莊檢注帳 案	国使 惣大判官代散位中臣 中臣朝臣定基	紀伊	2146
11	長承 1.11.13	1132	紀伊国岡田莊立券文 案	国使 散位中臣朝臣 在判 散位紀朝臣 在判	紀伊	2248
12	長承 1.11.16	1132	紀伊国山東莊立券文 案	国使 惣大判官代散位中臣 朝臣 在判	紀伊	2249
13	長承 1.11.16	1132	紀伊国山崎莊立券文 案	国使 大判官代散位中臣 朝臣 在判	紀伊	2250
14	長承 1.12	1132	紀伊国弘田莊立券文 案	国使 散位中臣朝臣 在判	紀伊	2257

「国使」をめぐる二・三の問題（関）

No.	年 月 日	西暦	文 書 名	国 使 名	国名	遺文
15	保延 1.12.29	1135	紀伊国荒川莊檢注帳	国使 郡司秦「是時」 散位紀朝臣在判「成 実」	紀伊	2336
16	久安 1.12	1135	讃岐国善通曼茶羅寺 々領注進状	国使 大掾綾真保 散位中原知行	讃岐	2569
17	仁平 3. 1.28	1153	伊予国山崎莊立券文 案	国使 惣判官代散位	伊予	2777
18	仁平 4.10.12	1154	安芸国三田郷立券状 写	国使 大判官代散位藤原朝 臣 大判官代散位橘朝臣	安芸	2802
19	保元 3. 5.10	1156	山城国勸修寺領田畠 檢注帳案	国使 中原 在判	山城	2922
20	保元 3. 5.10	1156	山城国安祥寺領寺辺 田畠在家檢注帳案	国使 中原 在判	山城	2923
21	永万 2. 2	1165	備後国大田莊立券文 案	国使 散位 平朝臣季盛	備後	補 106
22	仁安 1.11.17	1166	安芸国志道原莊倉敷 在家畠檢注帳	使 権介藤原忠信	安芸	3404
23	仁安 1.11.17	1166	安芸国志道原莊倉敷 代畠立券状	使 権介藤原忠信	安芸	3405
24	嘉応 1.12	1169	備前国足守莊絵図裏 判	国使 田所橘朝臣 案主散位弓削 官人散位藤原朝臣	備前	補 240
25	嘉応 2.12.28	1170	若狭御賀尾浦四方指	国使 中原 （花押）	若狭	補 356
26	嘉応 3. 1	1171	安芸壬生莊立券文	国使 散位佐伯朝臣（花押）	安芸	補 359
27	嘉応 3. 1	1171	安芸国厳島神社領壬 生莊田畠在家注進	国使 散位佐伯朝臣	安芸	3568
28	嘉応 3. 2	1171	遠江国池田莊立券状	国使 判官代桧前 介長谷	遠江	3569

降、顯著なることから判断して、おそらく雑任国司のそれであろう。しかも散位であることからしても、かく考えて大過あるまい。これらの諸点を念頭に置き「大和国使牒」を見てみよう。この史料は正暦二年（九九一）三月大和国添上郡に分布する春日庄田四町九段をめぐつて東大寺と興福寺の両者相論の際、大和国衙より理非弁定のため派遣された国使の東大寺への調査報告といふべき性格のものである。署判の形態から表中の他史料と同様、在庁官人のようでもあるが、関連史料から国使大掾五百井は任用国司であつたことがわかる。すなわち、永祚二年（九九〇）の大和国符案に、

国符 宇智郡司

可免除田肆町伍段租税事

（本文略）

守藤原朝臣御在判 大掾五百井

永祚二年十二月九日

とあるのがそれである。こうした任用国司の動向については、十世紀段階での受領国司による国衙行政権の掌握という趨勢の中にあつて、受領―任用の乖離が、任用国司の国務疎外を助長する傾向にあつたことは、従来からも指摘されているとおりである。が右述の検討からも推察されるように、任用国司が国使として活動している点は、注目値する。この他、寛弘八年（一〇一一）の肥後国宣案には阿蘇郡四境を注進する国使の存在が見えているが、そこに署名している介肥なる人物も同様に任用のそれであつたといえる。因に、任用国司のかかる動向については、平安中期における地方政治の矛盾を最も集中的に表現しているといわれかの尾張国郡司百姓等解の一文にも詳しい。「請<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>裁断」、令<sub>二</sub>雑使等入部<sub>一</sub>所<sub>二</sub>責取<sub>一</sub>「雑物之事」の事書をもつて始まる解文の十六条には、「使等毎<sub>レ</sub>郡



巨多也、所取上毛供給、正物之外已以三四倍也、（中略）就中検田之政、以任用国司（勸注之）、而或郡放濫惡之子弟郎等、或郡入不調之有官散位者」と記されており、ここから、われわれは十世紀のこの段階においてさえ、任用国司の本来の職責が問題とされているという事実を知り得るのである。しかし、この点はさておき、右の解文中でより重要なことは、従来任用のそれが行使していた検田等の国衙業務が国守元命の派遣した子弟、郎等、不調之有官散位という、いわば私的な受領集団ともよぶべき輩によって遂行されていたという事実であろう。各郡に派遣されたこうした子弟、郎等が一方では雑使とも表現されている如く、彼等こそが国使の実体であった。ここに国使に任せられる主体が漸次変化しつつあったことを知るのである。その意味で十世紀段階は地方行政機構の実質的な担い手にも少なからず変化が齎される端期でもあったと考えられる。

以上、ふれたことから明らかなように、当該期国使に任せられる主体は、必ずしも一様ではなく、任用国司の場合もあれば、受領の郎等、更には後述する如く郡司・国衙雑色人と種々の在存を考えることができる。したがって在庁官人との関連からいえば、その史料上の初出例から推して、彼等が国使に登用されるのは、もう少し時代がくだった段階と考えられる。もとより、かく理解することは、在庁官人に如何なる規定性を付与するかという点により、その基準は異なるであろう。問題はその規定を裏打ちする在庁官人概念成立の内在的諸条件を問うことではなければならない。私見によれば、十世紀段階においてはかかる在庁官人なる概念が必要とされる条件は未だ成熟していないと考えざるを得ない。従って受領に付随し下向した官人群を以って在庁官人と理解することも、逆に判官代等（十世紀のそれ）の国衙雑色人に代表される在地勢力を以ってかく解することも正しくないと考える。<sup>(19)</sup>それは何よりも前者の官人群と後者の土着勢力が結合、止揚されたところに成立し得る概念に他ならないからである。

ところで、平安中期以降、史料上には検田・収納など国衙の業務別分担にその名を負う諸種の使名が散見するよ

うになることは周知に属す。検田使・収納使に代表されるこれらの使が所謂国使の一種であつたことは、多くの史料が示す如くである。康和四年（一一〇二）、丹波国留守所に下された国司庁宣には「大山庄訴申二カ条事」として、「可早令停止検田使事」なる文言がその中の一つに見えているが、文中これに対応する個所には「右件庄、以<sub>三</sub>国使<sub>二</sub>専不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>検田<sub>一</sub>、早可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>停止<sub>一</sub>」とも表現されており、国使<sub>二</sub>検田使<sub>一</sub>であつたことを知る。他にも紀伊国石垣庄内にあつた右大弁平惟仲の所領を不輸租田とし、検田使の入勤停止を命じた正暦四年（九九三）の国符案<sub>(21)</sub>からも国使<sub>二</sub>検田使<sub>一</sub>の關係を知ることができる。また収納使に關しても天養元年（一一四四）十月二十日鳥羽院庁下文案所引の伊賀国在庁解に収納使を以つて「国衙之使」と表現していることから同様の事實を確認できる。その意味で国使とは検田使・収納使等を含む広い内容で使用され、国政上における使の総称と言うことができる。その限りでは国使自体の活動範圍は極めて広く、その名称は既に奈良時代にさかのぼることができる。また前述した正暦四年大和国使牒に見る如き、検田・収納使の行政上の業務分担から逸脱した存在としての国使も確認できる。小稿ではかかる国使の多様性に留意し、検田使・収納使などのように国衙行政を機能別に推進する在地執行吏を国衙使と呼び、広義の国使から一応區別して考えることにしたい。<sub>(23)</sub>

## (二)

前節では国使の名称が史料中如何なる形態で登場するのかを問い、合せてそれに任ぜられる主体に關し二、三の問題を提示したが、ここでの課題はかかる国使の国衙使としての具体的機能を検証することにある。もとよりこうした国使（国衙使）の機能上の諸側面に關して、大石直正、米田雄介両氏の研究<sub>(24)</sub>をはじめ若干の論考も部分的には存するところであり、あるいは屋上屋を架す個所もあるが、国衙権力機構の具体的内実に接近するための一助と

表Ⅱ

No.	年 月 日	西暦	史 料 名	使 名	国名	形式	備 考	平安遺文 No.
1	寛平 1. 12. 26	889	宇佐八幡宮行事例定文	検田使	豊前	B		4549号
2	承平 2. 9. 22	932	丹波国牒	調物使	丹波	B'	調物使蔭孫藤原高校	240号
3	天慶 3. 9. 3	940	因幡国東大寺領高庭莊坪付	見當使	因幡	B		251号
4	天曆 5. 2. 11	951	肥前国武雄社四至実検文	実検使	肥前	A	実検使加賀權守源朝臣	258号
5	天曆 7. 2. 11	953	伊勢国近長谷寺資財帳	勘済使	伊勢	A	大領勘済使外正六位上 竹首元勝	265号
6	天徳 2. 12. 10	958	橘元実伊賀国玉龍杣施入状 案	郡務使 勘済使	伊賀	A	勘済使散位阿閑朝臣 郡務使散位阿閑朝臣	271号
7	康保 2. 12. 19	965	伊賀国夏身郷刀称解案	勘済使	伊賀	A	案済兼預從勘六位上伊賀朝 臣	286号
8	康保 3. 4. 2	966	伊賀国夏見郷刀称等解案	勘済使	伊賀	A	勘済使伊賀	289号
9	永延 4. 9. 1	973	東寺伝法供家牒	検田収納使	丹波	B		307号
10	永延 1. 12. 9	987	筑前国筑崎宮塔院牒	検田使	筑前	B		328号
11	永延 2. 11. 8	988	尾張国郡司百姓等解	検田使、収納使	尾張	B		339号
12	永祚 2. 11. 21	990	大和国栄山寺牒	勘徴使	大和	B		341号
13	正暦 3. 4	992	紀伊国石垣上莊立券文案	郡撰使 郡務使	紀伊	A	追捕使丹波掾郡務使紀 皇后宮職御厨別当郡撰使紀	4908号
14	正暦 3. 9. 20	992	大宰府符	検田使	筑前	B		354号
15	正暦 4. 8. 28	993	紀伊国符案	検田使	紀伊	B		357号
16	正暦 5. 9. 27	994	紀伊国在田郡司解案	郡務使 郡撰使	紀伊	A	追捕使丹波掾郡務使紀 皇后宮職御厨別当郡撰使紀	360号
17	長保 1. 8. 27	999	大和国司解	早米使	大和	B'	早米使藤原良信	385号
18	長保 4. 2. 19	1002	山城国珍皇寺領坪付案	勘済使	山城	B'	勘済使栗田茂明	421号
19	長保 4. 9. 19	1002	東寺伝法供家牒	収納使	丹波	B		428号
20	寛弘 3. 11. 20	1006	大和国弘福寺牒	検田使	大和	B		444号

No.	年 月 日	西暦	史 料 名	使 名	国名	形式	備 考	平安遺文 No.
21	寛弘 7. 2. 5	1010	石部千吉請文	(郡務職)	伊勢	A	擬大領郡務職蔭新家連	453号
22	長和 2.10.15	1013	丹波国大山荘司解案	検田使, 収納使	丹波	B		472号
23	長和 2.11. 9	1013	大和弘福寺牒案	検田使	大和	B		473号
24	長和 3. 2.19	1041	筑前国符案	検田使	筑前	B		476号
25	寛仁 1.10.16	1017	官宣旨案	検田使	伊勢	B		479号
26	治安 2. 2.20	1022	筑前国符	郡撰使	筑前	A	郡撰使安倍	486号
27	長元2. 壬2.13	1029	東大寺牒案	収納使	摂津	B		515号
28	長久 2. 3. 5	1041	藤原実遠公驗紛失状案	勘済使	伊賀	A	勘済使小野	588号
29	長久 5.10. 7	1044	山城国乙訓郡司解	検田使	山城	B		618号
30	長久 5.11. 5	1044	山城国石原荘司解	検田使	山城	B	収納使目代高階	619号
31	永承 4. 9.10	1049	伊賀守藤原原則請文案	検田使	伊賀	B		673号
32	永承 6.	1051	大和国大田犬丸田結解	収納使	大和	A		693号
33	天喜 1. 7	1053	美濃国茜部荘司住人等解	検田, 収納使	美濃	B	収納使惣大判官代当麻	702号
34	天喜 1.	1053	大和国大田犬丸名結解	収納使	大和	A		708号
35	天喜 4.12. 5	1056	讃岐国善通寺田畠地子支配 状案	勘済使	讃岐	A		824号
36	康平 1. 9.21	1058	美濃国大井荘解案	検田使	美濃	B	国検田使威儀師蓮明	904号
37	康平 1.10.23	1058	大和国清澄荘司解案	検田使	大和	B'		912号
38	康平 3. 4.21	1060	近江国愛智荘司等解	収納使	近江	B		954号
39	康平 3. 5.29	1060	官宣旨案	検田使	美濃	B		956号
40	康平 3. 6.22	1060	官宣旨案	検田使	美濃	B		958号
41	康平 3. 6.22	1060	官宣旨案	検田使	美濃	B		958号
42	康平4. 壬8.20	1061	美濃国司解案	検田使	美濃	B		974号
43	康平 4.11. 5	1061	官宣旨案	検田使	美濃	B		976号

No.	年 月 日	西暦	史 料 名	使 名	国名	形式	備 考	平安遺文 No.
44	康平 4.11.30	1061	美濃国司解案	検田使	美濃	B		977号
45	康平 6. 3. 7	1063	勘済使紀某下文案	勘済使	讃岐	A	勘済使紀	988号
46	康平7.壬5.18	1064	讃岐国勘済使綾某下文案	勘済使	讃岐	A	勘済使綾	4634号
47	治暦 1.	1065	僧道進治田売券	郡務使	伊勢	A	大領郡摂使従五位下新家宿称	996号
48	治暦 2. 2.16	1066	官宣旨案	検田使	摂津	B		補 274号
49	治暦	1066	善通寺曼荼羅寺所司解	検田使	讃岐	B		補 171号
50	延久 3.10. 8	1071	珍皇寺司解	勘済使	山城	B	勘済使栗田茂明	1066号
51	延久 4. 6. 4	1072	大宰府実検使注進状案	実検使	筑前	B		1079号
52	延久 5.12.10	1073	大宰府政所下文案	実検使	筑前	B		1096号
53	承保 2. 4. 3	1075	珍皇寺所司大衆解案	検田使	山城	B		1110号
54	承保 2.12.28	1075	官宣旨案	検田使	美濃	B		1122号
55	承暦 3.11.13	1079	大掾案為辰解案	検田使	播磨	B		1171号
56	永保 2. 3.11	1082	大宰府政所下文案	検田使	筑前	B		4947号
57	応徳 1. 8.21	1084	筑前国観世音寺牒案	検田使、実検使	筑前	B		4947号
58	応徳 4. 1.24	1087	大宰府政所下文案	検田使	筑前	B		1252号
59	寛治 1. 8.16	1087	官宣旨案	検田使	美濃	B		1252号
60	寛治 3. 9.20	1087	大宰府公文所勘注案	実検使	筑前	B		1277号
61	寛治 7. 1.25	1093	筑前国観世音寺三綱等解案	収納使	筑前	B		1317号
62	寛治 7. 8.21	1093	太政官符案	検田使	近江	B		1319号
63	嘉保 2. 5. 1	1095	宇佐大宮司下文案	検田使	日向	B		1345号
64	嘉保 3. 5.12	1096	官宣旨案	検田使	美濃	B		1353号
65	永長 2. 2. 2	1097	官宣旨案	検田使	伊賀	B		1373号
66	康和 2.10. 7	1099	伊勢大神宮検非違使并在郡司等解案	(納所使)	伊勢	B		1416号

No.	年 月 日	西暦	史 料 名	使 名	国名	形式	備 考	平安遺文 No.
67	康保 4. 8. 25	1102	丹波国司庁宣案	収納使	丹波	B		補 293号
68	康保 4. 9. 6	1102	丹波国司庁宣案	検田使	丹波	B		1419号
69	康保 5.	1103	大和国櫛北莊稻吉名負田坪付	検田使	大和	B		1531号
70	長治 1. 12. 19	1104	紀伊国崇敬寺別当頼慶請文	(勸農使)	紀伊	B		1628号
71	嘉永 1. 8. 18	1106	東大寺牒案	検田使	大和	B		1664号
72	嘉永 2. 10	1107	東大寺政所下文案	検田使		B		1678号
73	嘉承 2.	1107	僧頼源解	郡撰使	豊前	A	郡撰使検校藤原	1679号
74	元永 1. 12. 13	1118	伊賀国名張郡々司等勘注	検田使	伊賀	B		1739号
75	保安13. 3. 11	1122	伊賀国大国莊専当解	(実検使)	伊勢	B		1960号
76	保安 3. 3. 25	1122	近江国司庁宣写	収納使	近江	B		1962号
77	天治 2. 11.	1125	伊勢国大国莊専当藤原時光解	(実検使)	伊勢	B		2054号
78	天治 3. 1.	1126	伊賀国名張郡司解案	収納使	伊賀	B'	収納使遠村	2058号
79	大治 1. 9. 11	1126	伊勢国大国莊損得注文	(実検使)	伊勢	B		2089号
80	大治 2. 8. 28	1127	筑前国山北封所当結解状	実検使	筑前	B		2108号
81	大治 4. 12. 3	1129	明法家勘文	収納使, 検田使	伊賀	B		2147号
82	天承 2. 2.	1132	東大寺牒案	検田使	大和	B		2220号
83	保延 4. 5. 20	1138	鳥羽院庁下文	検田使	近江	B		5001号
84	保延 5. 7. 28	1139	鳥羽院庁下文	検田使	紀伊	B		2412号
85	保延 6. 11. 11	1140	伊賀国留守所下文案	収納使	伊賀	B		2437号
86	保延 6. 11. 28	1140	伊賀国黒田莊出作名田官物返抄	収納使	伊賀	A	収納使藤原	2338・ 39号
87	保延 6.	1140	上総国能勢村今富名坪付案	検田使	上総	A	検田使書生大判官代額田	2440号
88	康治 1. 12. 11	1142	伊賀国大屋戸出作官物検納状	収納使	伊賀	B		2489号

No.	年 月 日	西暦	史 料 名	使 名	国名	形式	備 考	平安遺文 No.
89	天養 1. 5.17	1145	僧義豪申文	(検注使)	大和	B		2529号
90	天養 1.10.20	1145	鳥羽院庁下文案	収納使	伊賀	B		2541号
91	久安 4.10.29	1148	官宣旨案	検田使	伊賀	B		2655号
92	保元 2. 8.23	1157	東寺領垂水荘政所下文案	早米使	摂津	B		2895号
93	保元 3. 5.12	1158	東大寺三綱解案	検注使	山城	B		2924号
94	保元 3.11.21	1158	大和国目代中原貞兼請文	検注使	大和	B		4774号
95	永暦 1.	1160	大和国木原荘注進状	検注使 収納使	大和	B	検注使播磨庁官顯盛 収納使斎宮介為正	4782号
96	永暦 1. 5.22	1160	伊賀国司庁宣案	济物使	伊賀	B		3095号
97	応保 1. 2	1161	土佐国幡多郡収納所宛行状 写	収納使	土佐	A	収納使惟宗	3184号
98	嘉応 1.10. 9	1169	大隅国台明寺住僧解	検田使	大隅	B		3184号
99	嘉応 3. 1.15	1171	安芸国留守所下文	収納使	安芸	A	収納使 朝臣	補 358号
100	承安 3.11.15	1173	大隅国台明寺住僧案解	検田使, 勘濟使	大隅	A	勘濟使散位藤原	3645号
101	安元1.壬9.23	1175	伊賀国在庁官人解	収納使	伊賀	B		3709号
102	安元 1.12	1175	東大寺衆徒解案	収納使	伊賀	B		3732号
103	安元 3. 3	1177	新興寺住僧等解案	検断使	紀伊	B		3785号
104	治承 3.10	1179	安芸国司庁宣案	収納使	安芸	B'	収納使田所則包	3887号
105	治承 3.10.18	1179	沙弥行蓮書状	収納使	安芸	B		3929号
106	養和 1. 8.18	1181	後白河院庁公文所問注記案	収納使	伊賀	B		3998号
107	寿永 2. 7	1183	散位平兼資解	(勸農使)	安芸	A	勸農使散位	4098号
108	元暦 1.10.15	1184	金剛寺住僧等解	検田使		A	検田使下野先使「王」	4210号

※形式欄にA B' B とあるのは各諸使の文書に見える表現形態を示す(Aは郡判その他に署判があるもの、B' は文中に見えているもののうち、その姓名を知りうるもの、Bは単に文中に使名のみしか記されていないもの、このうちA B' でその姓名が判明するものは備考欄にこれを示した。

※また、使名のうち、( ) に付したものは、必ずしも国衙使とは考えられないものであるが、参考までに記した。

して、以下の如き網羅的分析もまた必要と考え、あえてここに列举することにした。

さて、第Ⅱ表は「平安遺文」より国衙使と目される各諸使名を掲示したものである。必ずしも完全なものではないが、大略その傾向は知り得るであろう。尚、ここで問題とするのは、国衙諸行政分野のうち勸農・収取等にかかわる使名のみであり、押領使・追捕使・検非違使等の検断業務に関与する所謂「国衙三使」と呼ばれる存在や弁済使のような国司請負制下における家産的協働関係を問題としなければならぬものについては、それぞれ個別的研究もあることであり、ここでは除外しておきたい。

以下(A)～(D)の八種類の国衙使について、表中から気付いた諸点をふれておこう。

(A)「検田使」 「今昔物語」卷十七―五には陸奥国司平朝臣孝義の郎等に仕える男が、孝義の陸奥守任中、検田之使として該地に下向して検田業務にたずさわったことが記されている。説話としての性格上、史実か否かは問題にしても、孝義の実在から推してここに見る検田使の話は十一世紀初頭の頃のものであるが、検田使自体はかなり早い時期からあったと考えられる。<sup>(26)</sup>その分布をⅡ表より見れば、畿内近国及び西国方面の諸地域に多いが、史料残存の偏在性も加味しなければならず、また検田機能が地方行政上に占める役割から考えて、ほぼ全国的規模で存在したものと思われる。地域によって重複するものもあるが、それが収納使と同様、量的に最も多く見られることからして国衙行政の実質的運営主体となっている事情を窺わせる。

機能及び職掌については、「而年来之間、国検田使卒ニ違先例一、入ニ検庄内一、雖ニ注ニ作田一」（No 15 正暦 4・8・28 紀伊国符案）あるいは「而国検田使背旧例一、悉以収公、付ニ徴臨時雜役二之間」（No 22 長和 2・10・15 波国大山莊司解案）などの文言から、所当官物・臨時雜役賦課のための田数注進に携っていたことは論を俟たない。このことは当時の国衙の支配原理において、公田見作と所当官物の数量的把握が第一義的であったという事実、さ



らには平安後期国衙領の收取体系が米納を中心とする所当官物と夫役・雑物より成る臨時雑役（≡国役）の二系統によって構成されていたとの指摘<sup>(27)</sup>を考え合せれば、かかる検田使の機能の重要性も推して知るべきであろう。

(B) 「収納使」 「検田収納使」としばしば併称されているように<sup>(28)</sup>、収納使は検田使とともに国衙行政の中枢的役割を担う国衙使と考えられる。その点で時期的・地域的に検田使とは同様の分布を示している。「類聚三代格」

昌泰四年（九〇二）閏六月二十五日付太政官符に見える収納使の存在はその比較的早い例といえる。また「今昔物語」巻二四―五六話には、「賤ノ郡ノ収納ト云事ニ宛テ有ケレバ、喜テ、其ノ郡ニ行テ、郡司ガ宿ニ宿テ、可成キ物ノ沙汰ナドシテ、四五日許有テ、館ニ返ニケリ」とあり、播磨国守高階為家の下で収納使であった男の説話が載せられている。さて、その機能であるが、徴収業務に關与していたこと、諸史料に依拠するまでもないであろう。

例えば前述の丹波国大山莊司解案では、「右件庄四者：（中略）：任ニ見作一被ニ免除ニ已了、而国検田使背ニ旧例、悉以収公、付ニ徴臨時雑役之間、収納使入部官物勘責」とあり、検田使による見作田の田数注進―収公―臨時雑役（国役）乃至は官物の付徴にもとづき、収納使が入部して官物を勘責するというパターンを確認できる。また「可レ令ニ早速ニ収納使催、并ニ済出作田所当官物事」（No 90 天養1・10・20 鳥羽院庁下文）と表現されていることから、この収納使の職責が官物徴収にかかわっていた点を知る。こうした機能の他にも、保延六年十一月二十八日付伊賀国黒田莊出作名田官物返抄（No 87）に署名する収納使の存在などから返抄の発給にも携っていたことを知るのである。さらに、この収納使が結解作成―進未沙汰も含め広範囲に亘る徴収機能を有していたことは、収納所との関連で既に大石直正氏の指摘<sup>(30)</sup>されているところでもある。

(C) 「調物使」 承平二年（九三二）九月二十二日付丹波国牒（No 2）に一例、その存在が見えている。これは「堪百姓名」として有名な史料でもあるが、同史料には多紀郡の「調物使藤原高枝」なる人物が同郡の「余部郷專

当校校日置貞良」とともに調絹の徴収に当たっていたことが見える。この日置貞良は別の史料に郡司として署判していることから調物使は国衙から派遣されたものと考えられる。次節でもふれるが、十世紀は郡司制の変質に伴い、彼等郡司が郷別に業務を専当する郷別専当郡司制が展開する時期でもあった。その結果、郡司の機能・職責が分掌されていたこともあって、旧来の郡司の機能を補う目的から郡毎に派遣された存在として、この調物使を理解すべきであろう。その意味で、調物という税目にその名を負う国使の名称も、令制的な税目別分担にもとづく郡司の在り方から地域別（郷別）のそれへと郡司制が変化したことを前提に、国衙による郡衙（郡司）機能の包摂・吸収を示すものとして考えられる。

(D)〔見営使〕延喜十五年十月二十二日付丹波国<sup>(34)</sup>藤及び天慶三年九月二日付因幡国東大寺領高庭莊坪付（No 3）の二例に見営使の名辞が見える。このうち前者については国衙在庁所との関連で既に高田実氏によって詳細な検討が加えられているが、文中「見営使」と読むべきか、あるいは「見営使所」と読むべきかは問題の残るところなので、表中には入っていない。ただ「見営」そのものの字義からすれば、氏の指摘される如く「現営」と同義であり、現地における田地の経営状況の実態調査というほどの意味あいがあったと考えてよからう。後者の例では史料中、見営使は以下のように記されている。

高草郡公文預勘申 東大寺田坪付事

合捌町壹段参佰参歩

（中略）

右件寺田、依見営使符旨、勘注所<sup>レ</sup>進如<sup>レ</sup>件

天慶三年九月二日

この史料は東大寺田坪の勘注を実際に行った郡司（公文預）の勘申状としての性格を持つものであるが、この調査＝勘申が見營使の命によって遂行されていたこと。そしてここに見る見營使が在地に下向したか否かは不明としても、田数調査権を有し、図師たる郡司の一部（公文領）に対し、これを上から指揮するものとして存在したことは注意しておきたい。

(E)〔実検使〕 主として筑前・肥後等の九州諸地域に数例散見する。機能的には検田使とほぼ近似したものと考えられる。例えば応徳元年（一〇八四）の筑前国観世音寺牒案（№57）には検田使によって勘出された寺領黒島莊の一部を本公驗に任せて免除せられんことを申請した旨が記されているが、これを受けた筑前国衙は再調査のために実検使を遣している。かかる事例から察するに、実驗使とは検田使による田数勘出の結果、領主側の把握する田数との間に齟齬が生じた場合、問題となっている論田を再調査するための使という性格を持っていたと考えられる。<sup>(36)</sup>

(F)〔早米使〕 「郡早米使」（№17）・「国衙早米使」（№92）として大和・摂津両国に見えている。前者は城下郡早米使の藤原良信が強盗のために殺害された事件で、犯人追捕の官裁を申請した大和国司解に見えている。その機能については、該史料にふれるところはないが、文中この早米使を国使とも表現している点は確認できる。また後者のそれは、保元二年（一一五七）の東寺領垂水莊政所下文案に載せるもので、「俄令<sup>レ</sup>乱<sup>ニ</sup>入<sup>ル</sup>数多使<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>庄内<sup>ニ</sup>、号<sup>ニ</sup>早米使<sup>ト</sup>令<sup>ニ</sup>責<sup>ニ</sup>勘<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>条<sup>ニ</sup>、甚<sup>ニ</sup>以<sup>ニ</sup>不当<sup>ニ</sup>事<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>」<sup>とあり、史料中の早米使と号して責勘せしむる具体的内容が「臨時雜事国役」にあったことが知られる。このように臨時雜事などの負課が早米使と号することによって遂行されている</sup>事實はその機能の一端を知る上で参考になる。

(G)〔勘済使〕

伊勢・伊賀・山城・讃岐・大隅等の諸国に見えている、分布地域から実際にはもっと多く存在し

たと考えられる。字の如く所当物の勘済に従事したものと想像できるが、明確にその機能を確認できない。ただこの勘済使については「公驗流記帳悉焼失、愛寺家請乞国郡図帳勘判之曰、勘済使粟田茂明・高向福忠等勘進之図帳、以此為公驗」（No 51 延久 3・10・8 珍皇寺解）と記されていることや、あるいは長久二年（一一〇四）の藤原実遠公驗紛失状解案に署判していることから推して、彼等が公驗紛失の際の図帳勘進や種々の保証行為にも従事していたことが判明する。もっとも、彼等の多くは郡判に列していることから理解されるように、右の機能自体、勘済使のそれというよりもむしろ郡司たることによると考えられる。また讃岐国の例（No 45・46）ではあるが、官物や地子物の徴収にも携わり、独自に文書を発給している事例もある。

(四)「郡務使・郡撰使」 前述の勘済使と同様、そのほとんどが郡判に加署している点から郡衙系の使と判断できる。表中からも明らかなように時期的には十世紀後半から十一世紀前半に集中して散見することも興味をひく。因に「郡」を冠する使名としては、郡調物使（No 2）・郡早米使（No 17）などがある。また検田使・収納使も場合によつては史料中郡検田使（No 30）・郡収納使（No 76）と呼ばれていることもある。しかし同じく「郡」という字を冠する名称を持ちながら、これら諸使と郡務使・郡撰使の両者は、本質的に異なる性質を有する。言うまでもなく、この両者は「郡」を冠してはじめて一定の意味を持つこと、これである。そのことは郡務及び郡撰という言葉が、検田・収納・調物・早米などの如き業務別にその名を負う個有名詞ではない点とも関係する。寛弘七年（一一〇〇）、石部千吉請文（No 21）の郡判中に見えている「郡務職」なる名辞は、その意味でこの両者の性格を考える際の参考になる。すなわち、郡務使が「職」と表現されていること自体、他例にない特色でもあり、郡衙統轄の職責を負うところに由来する名称としてこれを考えることができる。また郡務使・郡撰使の両者は国司代・国目代などの所謂「国衙官人郡司」とともに郡判に署判するケースも多く、伊賀国の例をとつても阿閉氏などの名族が起用されている

る。(No 6) しかしかかる傾向も十世紀までであり、これ以降はいささか趣を異にする。ともあれ郡務使・郡撰使などのように国衙に対する使たる名称がこの時期に一般化することは郡司制の変質を考える上でも重要であり、旧来の郡司が国衙機構の一環に包摂されてゆく過程を示唆するものと言い得る。

以上、(A) (B) に分けて国衙使と目される諸使の存在について、二、三気付いた点をふれてきた。なお表中には勘  
 徴使・納所使・検注使勸農使等の使名が若干存在するが、事例も少なく必ずしも国衙側のもののみではないので、  
 ここでは省略する。この他にも該時期の史料には、検断使・国領使・拒捍使、幹了使など駆々の名を持つ使があつたことは、「四郎君受領郎等判史執鞭之図也、於五畿七通無所不届」(中略) 況於田使・收納・交易・佃、臨時雜役之使、不望所懸預二」という有名な「新猿楽記」<sup>38)</sup>の一部を想起するだけで充分であろう。

ところで、これら諸使と国衙在庁所との関係について詳しい検討は紙数の都合上別稿に譲るとして、ここでは簡単にふれておく。一般に「所」自体の存在が既に律令制下でも確認できることは森田悌・佐藤宗諱両氏の指摘にあるとおりであろう。しかし、国衙行政の中で在庁機構としての「所」が現実機能を持ち始めるのは十世紀末〜十一世紀以降ということになる。史料上の初見事例からもこの点は疑いない。このことは国使(＝国衙使)が十世紀初頭には地方行政分野に登場してくることを考えるならば、かかる在庁所と国使(＝国衙使)との関係は即時的に対応するものではなかったと言える。この問題はやはり郡司制の変質を視野に入れなければ解けないであろう。これは郡検田所・郡收納所などに見られる各諸所が旧来の郡衙(郡司)の如何なる権限・権能を吸収して成立してくるかという点をおさえなければなるまい。前述したように郡務使・郡撰使に登用される主体が十世紀段階ではいまだ旧来の郡司であったことは変質しつつあるとはいえ、いまだ国衙在庁所成立の条件を完全に満たすものとはなっていない点で注意を要す。そしてこのことは何より郡検田所・郡收納所がいずれも十一世紀以降に史料に広く登場する事

実とも符合する。ただし、全ての在庁所が画一的に十一世紀以降に機能するわけではない。例えば「田所」などは十世紀の前半には認められるが、これは田文や国図の保管さらには田数の勘案・調査等、受領の諮問機関としての性格も強く国規模で存在したもの、それだけに時期的にも比較的早くから存在したものと考えられる。

### （三）

前節では検田使・収納使に代表される各諸使の機能について、その基礎的事実の確認を試みたが、本節ではかかる国衙使が十世紀以降広範に登場する意味について考えることにする。そこでまず国衙使自体、如何なる条件の下でその登場が可能になるのかを郡司制との関連で検討しておく。

さて、前節で国使任用主体の変節を知るうえでの素材として、尾張国郡司百姓等解にも若干閑説したが、同史料の第十六条にはまた次の如き文言が見えている。

「右、使等毎郡巨多也、（中略）又段米収納使等之子姪郎等有官散位、受配符入部之日、先所行有様已背以往例、自郡司之手、号郷分之絹所取絹、一郷五六疋也、但一郡所注田堵四五人也、漸計其所得、動以及四五十疋、亦自田堵五六人之手所責絹、三四疋又一二疋也、一郷所注田堵四五人也」

この史料には元命配下の郎等有官散位の輩が収納使として部内に入部し郡司百姓にとって非法と意識される数々の勘責を行っている様子が指摘されている。その際考えなければならぬは収納使による雑物（この場合絹）徴収が「自郡司之手、号郷分之絹所取絹」とあることから知られる如く、郡司を介して行われた点である。と同時にこのことからわれわれは郡司が郷毎に絹等の雑物の徴収業務にあたっていた事実も窺うことができる。郡司がこのような郷別（地域別）の徴収責任者として存在していること自体、旧来の郡司の在り方とは異なるものと言え

る。かかる郷務を専当する郡司（＝郷専当郡司）の存在については既に指摘されているところでもある。因に寛平七年（八九五）九月二十七日付太政官符所引の美濃国解には「凡諸国例、分<sub>三</sub>配郡司<sub>一</sub>、宛<sub>三</sub>租税調庸専当<sub>一</sub>、役駈<sub>三</sub>土浪差<sub>三</sub>進<sub>三</sub>官雜物綱<sub>一</sub>」<sup>(42)</sup>とあり税目別の専当郡司について記されている。この税目に名を負う郡司として「調庸綱領郡司」あるいは「租税専当郡司」等は広く知られているが、かかる郡司（＝令制的郡司）は先の郷別専当郡司とは異なる存在であることは言うまでもない。ここに十世紀には税目別専当郡司制から郷別（地域別）専当郡司制へと変化することを知る。このことは泉谷氏も指摘されているように、十世紀の郡判及び郡司解に見える郡司数（郡判の上段加署者数）と和名抄郷数とが一致する場合が少なくなかった事実とも関連する。前節でふれた承平二年九月二十二日丹波国牒に見えていた多紀郡余部郷専当日置貞良もそうした郷別専当郡司であったことは諸氏の指摘のとおりであろう。と同時に右史料はその名称を税目に負う国衙使＝調物使の活動を知る上でも重要なものである。かかる調物使の存在は郡司制との関連から言えば、郷別専当制の導入によって、旧米の郡司が有していた税目別の職責を国衙の使が代替したことを意味する。ただし同じ国衙使と言っても、尾張国郡司百姓等解に見る收納使の如き使とはいささか異なるものがあつたと言える。それは調物使のような税目系統の使の存在は十一世紀にはもはや史料上にその姿を見せなくなり、これに代って十世紀後半より検田使・收納使など行政上の業務内容にその名を負う使が広く散見するようになるからである。この点は如何に解すべきであろうか。前記の承平二年丹波国牒は「名」の初見史料としても有名なものであるが、これによれば徴納物の収取は郡調物使＝郷専当郡司＝堪百姓名（負名）というルートであり、調庸等の徴収が郡司を通じて行なわれていたことを知る。因に右に見る堪百姓の実体が所謂「力田之輩」にも比すべき田堵層であつた点は多く認められているところであるが、その場合かかる負名（田堵）へ徴収が未だ郡司の存在を無視しては遂行し得ない段階にあつたことは留意すべきである。その意味では

調物使の存在自体あくまで臨時的性格以上のものではなかったことを知るべきである。一方、収納使については、殊に十一世紀以降、郡司を介することなく直接田堵<sup>45</sup>負名層を掌握する傾向が一般的となる。「而当時御任、不論是非、皆悉以収公、<sup>45</sup>□□収納使并方々使、切勘尤甚、貧弊之田堵等、故難レ回レ跡」（長元二年閏二月十三日東大寺牒案）とある文言や前記尾張国郡司百姓等に見える収納収による田堵への関与の仕方からもこのことは窺えよう。とすれば十世紀段階の如き郷別専当郡司を前提とする税目別使名（調物使）による徴収ルートは収納使の広範な出現で現実的意味を失うであろうことも看取し得る。したがって、収納使等に代表される国衙使登場の意味とは何よりも、従来の郷別専当郡司一負名の徴収ルートを切斷し調物使の如き、税目系統の使の機能を国衙行政の中核的分野に恒常的な形態で包摂したところにあったと言える。

ところで、郡務使・郡撰使など国衙に対する使たる意味の使名が十世紀に散見するが、彼等の実体が郡司であったことを考え合せれば、これは郷別専当郡司制の施行を前提として、郡規模で郡務を統轄させたところに生まれた名称と考えられる。既述の如くこれが「郡務職」（郡務執行権）とも表現されるべき内容を持つ性格の使であったことを想起しても、この点は疑いない。国衙はかかる郡司層を「国衙に対する使」として位置づけながら、在地支配へと乗り出す。周知の如く、およそ律令制下における国郡支配の特色は郡司の在地支配を踏えて、国司制（国衙）による公民支配秩序が維持されていたところにあった。したがって国衙使の成立とはこうした旧来の支配秩序にかわり国衙による在地への直接支配を可能にする条件を醸し出した点に意味があった。

さて、一般に十一世紀以降郡・郷がともに並列的關係として国衙に直結する単位となることは広く知られている。その結果、郡司と異名同体たる郷司の出現をみることは松岡久人氏の指摘にあるとおりであり、かかる郷司的郡司の先蹤も叙上の如き郷別専当郡司にあったと理解される。因に十世紀末から「在地郡司」乃至「在郡司」な



る名称の郡司が史料上散見するようになることは、先稿でもふれたが、これは郷別専当郡司を前提として出現した所謂郡司的郷司と同様の実体を指すものと考えられる。「在地郡司」とは郡司によるかかる地域別分掌責任制<sup>(47)</sup>郷専当制により、令制的郡支配権の秩序が崩壊し、彼等が「在地司」として存在するようになったことに生まれた名辞なのである。「国使并在地郡司刀称」なる文言が十一世紀以降しばしば散見するが、「在地刀称」とともに位置づけられる「在地郡司」のこうした例は、まさにこのことを裏付けるものとい得る。

以上、国衙使成立の諸条件を郡司制とのかかわりで二三考えてきたが、最後にこの問題を国司制との関連で概観しておこう。

これまでの行論の関係上、国衙による在地支配<sup>||</sup>部内支配のための国使を以って国衙使なる語を使用してきた。しかし当然のことながらかかる国衙使の存在は所謂摂関期から院政期の長期に亘っており、これに任用される主体も決して一様ではなかったはずである。殊に国司の遙任化が進み留守所制が展開する段階では、国衙使の性格にも変化が見られると思われる。すなわち留守所を構成する在庁官人によって国衙行政が運営されるに及んで、国衙使に登用される主体も必然的に変化するようになる。在庁(官人)なる用語は単なる国衙官人という意味以上に留守<sup>(48)</sup>なる言葉と対応するものと思われる。従って国守(受領)の赴任・下向を前提として展開される十世紀段階の地方行政においては、未だ在庁なる用語は熟していないと判断される。このことは前述したように在庁乃至在庁官人の語が十一世紀以後に初見する点とも密接に関連しよう、院政期以降「留守所之使」あるいは「留守所使」などの名が史料上に見られるが、これがしばしば「国衙使」とも表現されていることは、その任用主体を探る上で手がかりを与えてくれる。このことは受領による直接的な在地支配が顕著である十世紀段階における国衙使の性格を考えれば、一層明確になる。一般に検田使・収納使等種々の名称で呼称された国衙使に共通する性格は、それが臨時の任

用たるところに存した。殊に受領の赴任・下向を前提として国衙運営に参画した十世紀段階の国衙使には、前に指摘した尾張国郡司百姓等解に見る如き中央下向の子弟・郎等・有官散位の輩などがこれに任用される場合が多かったことは否定できない。その意味では該段階の国衙使は受領の爪牙として性格を濃厚持ち、それだけにかかる国衙使を通じて受領の恣意も増幅される。受領が任国で治績をあげ得たのも、自己の立場に有利な受領の私的集団を任意に登用することが、許される条件があったからに他ならない。該時期、かかる受領の専断に伴い国司苛政上訴闘争が集中することは周知に属すが、そこにはかかる国衙使を介して体现される恣意的な収奪を「在地法」を通じて規制する方向は未だ顕在化していないと言える。ここに言う「在地法」とは不入制と領域的支配に基づく荘園法とも言い得るものであり、<sup>(49)</sup>独自の社会的・政治的共同組織として作用した農民の社会的生存諸条件を内包する中世村落の形成を前提に生成されるものでもあった。その点、尾張国郡司百姓等解に代表されるこの時期の国司の税政に対する弾劾が、入間田氏の指摘されるように一國規模での闘争形態を取らざるを得なかった意味も、この「在地法」をその深部で支える基盤（村落共同体）が未だ生誕の途にあったことによる。このことは解文中に見る受領直属使人<sub>11</sub>子弟・郎等による専断的部内支配を上訴する主体が郡司にあった点からも理解できよう。

しかし、かかる国司苛政上訴闘争を経て受領の専横が漸次抑止される体制も生まれたことは、国衙使の在り方を考える上で重要である。指摘されている如く十一世紀以降、公田賦課率の固定として結果する新たな事態<sup>(51)</sup>もこうした苛政上訴闘争を前提とするものであった。かかる状況下では受領による恣意性も極端に制約されはじめる。さらにこれを下から規定する条件も成熟していたことは天喜三年（一〇五五）の丹後国後河莊田堵等解<sup>(52)</sup>や久安六年（一一五〇）の伊予国弓削莊百姓等解<sup>(53)</sup>に見られるような住人・百姓等解による反国役賦課・反国使入部闘争が広範に展開することからも明らかである。その意味で前述した「在地郡司」「在地刀称」の語がこの時期に一般化し「国使

并在地郡司刀称」なる用例が多く散見するようになることにも留意しなければならない。国使とともに活動する郡司や刀称の存在を以って、単なる「在地司」として国使体制下における在地支配のための付属物と見做す見解もあるが、彼等の「任人」（「在地」）世界の体現者としての側面、換言すれば国使の非法を「在地法」を通じて抑止する存在としてのそれにも注意を要しよう。

ともあれ、ここに至って国司（受領）の遙任化という事情も相俟って、従前の如き現実を無視した任意にもとづく国使Ⅱ国衙使の起用は有効性を持ち得なくなることは想像に難くない。そこに「在地法」に精通する存在を国衙使として選定せざるを得ない状況も生まれるのではなからうか。

×

×

×

以上、従来の研究史上の隘路になっている国使（国衙使）について、気付いた諸点を述べてきたが、もとより残された課題は多い。殊に国使（Ⅱ国衙使）の実態面での究明は空白の部分も多く、各種国使の総体的連関を国衙機構論として位置づけるためには、この点の解明こそ急務と言える。小稿で扱った問題はこうした実態論を深化させるための基礎作業であり、その意味では覚え書き程度以上のものではないが、大方の御批判をいただくことができれば幸せである。

〔註〕

- (1) 泉谷康夫「平安時代における郡司制度の変遷」（『古代学論集』所収）。高田実「中世初期の国衙機構と郡司層」（『史学研究所』六六号）。米田雄介「在庁官人制の成立」（『日本史研究』一一八号）。のち同氏「郡司の研究」に所収。菅田慶信「中世成立期の郡衙と在地領主」（『歴史』第四八輯）。

- (2) 大石直正「平安時代の郡・郷の收納所・検田所について」（豊田武教授還暦記念会編『日本古代・中世史の地方的展開』）

所収）。

- (3) 入間宣夫「鎌倉前期における領主的土地所有と『百姓』支配的特質」（一九七二年度『歴史学研究』別冊特集号）。
- (4) 「古事類苑」政治部十一。
- (5) 例えば、天平神護二年十月十日越前足羽郡司解案（東南院文書二一五二四）には国使の存在を確認できる。
- (6) 「平安遣文」一三五三号。
- (7) 「平安遣文」三三八号。
- (8) 「平安遣文」一〇三九号。
- (9) 「平安遣文」七五六号。
- (10) 「平安遣文」八八七号。
- (11) 「平安遣文」四〇六号及び補遺七号。
- (12) 「平安遣文」一七三九号、これは東大寺興福寺両寺の相論をめぐる証拠文書として興福寺側より提出されたものであり、貞観六年という実年代からして、若干信憑性を欠くが、国使の機能を知る上では、支障がないので一応掲げておいた。

(13) 「『在国司職』成立に関する覚書」（『学習院大学文学部研究年報』二五号）。

(14) これについては、竹内理三「在庁官人の武士化」（『日本封建制成立の研究』所収）を参照。

(15) 「平安遣文」三四二号。

(16) 「平安遣文」四五九号。

(17) 「平安遣文」三三九号。

(18) 「平安遣文」による限り、在庁官人の語が見えはじめるのは十一世紀中葉であり、永承五年七月二十一日太政官符案（『平安遣文』六八一号）に見える「在庁官人」の語はその比較的早い例といえる。

(19) この点、高田実・米田雄介両氏の所論は在庁官人制の成立を十世紀初頭に置かれているようであるが、疑問を覚える。ただし米田氏の場合、在庁官人制の成立時期の問題よりも、むしろその成立の前提に主眼を置かれている。

なお、在庁官人の概念については義江彰夫氏が「平安鎌倉時代地方政治の構造と展開」（『幕府鎌倉地頭職成立史の研究』所収）で指摘されている。

(20) 「平安遺文」一四九九号。

(21) 「平安遺文」一三五七号。

(22) 「平安遺文」二五四一号。なお、康平四年四月十五日的美濃国に下符された官宣旨案にも国使と検田使との関係を知る上で興味深い内容が語られている。

(23) 今、この国衙使なる名辭を積極的に用いる意味について、誤解なきよう若干付言しておく。一般に十世紀以降、国衙系・郡衙系を問わず多くの「使」が見られるが、殊に後者の如きその出自を郡司層に持つ使名―例えば勸濟使・郡務使・郡撰使等―に関してはその位置づけが充分ではなかったと思われる。勿論・諸種のタイプの使を大別して国衙系・郡衙系とその出自に従いこれを理解することも必要であるが、しかしこの段階の郡司制が指摘されている如く国衙官人郡司制とよばれるものであり、郡司であると同時に国衙に列している場合も少なくない。その意味では国衙レベルでの在地に対する権力の発効―定着の様相を国衙系・郡衙系の使を問わず総体としてこれを問題としなければならぬであろう。国衙使概念とはこうした郡衙系の使を国衙権力機構の一環として位置づける際に有効性を持ち得るのではなからうか。

(24) 大石直正・米田雄介氏前掲論文。

(25) 「今昔物語」卷十七―第五話には、

「今昔、陸奥ノ前司、平ノ朝臣孝義ト云フ人有リ、其家ニ郎等ニ仕フ男コ有ケリ、実名ハ不知ズ、字ヲバ藤ニトゾ云ケル。而ルニ、孝義、彼ノ国ノ守ニテ有ケル時、件ノ男ヲ以テ検田ノ使トシテ先ニ下シ遣ル」と見えている。

(26) 表中には入っていないが、弘仁年間と思われる「太政官符案」に「以去十月五日庄司所進解状云、件御庄田園検田使悉收公、付徴租税之責」とあり、検田使の存在を確認できる。（『平安遺文』三六号）。

なお、検田使には国衙側のものと、荘園領主側のそれがあったことは周知に属すが参考までに後者の例を二三あげておく。（『平安遺文』八二一号、一六二七号、二二二八号など）。

(27) 戸田芳実「国衙領の名と在家について」（『日本領主制成立史の研究』所収）。

また検田使の機能・役割が十世紀以降、殊に顕著になる背景には荘田の不輪租範圍を限定し公田の確保をめざす国司の国内検田権の強化という事情もある。この点については坂本賞三『日本王朝国家体制論』に詳しい。

(28) かかる例は『高山寺本古往来』の「書礼令」・十七の一節にも「是則及前司任終年・公事巨多之上、検田使收納使等横被張行旨」を見えている。なお「平安遺文」七〇二号）も参照のこと。

- (29) 「類聚三代格」卷二十。
- (30) 「平安遺文」二〇五八号。かかる収納使の機能については収納所との関連で大石直正氏前掲論文に詳しい。
- (31) 「平安遺文」二二二号及び二四一号を参照。
- (32) 平野博之「平安初期における国司郡司の關係について」（『史淵』七二号）。松岡久人「郷司の成立について」（『歴史学研究』二二五号）。米田雄介『郡司の研究』など。
- (33) 泉谷康夫「平安時代における郡司制度の変遷」（『日本古代学論集』所収）。
- (34) 「平安遺文」二二三号。
- (35) この問題について、前掲論文において若干、検討を加えておいたが、その問題の個所を「見當使所」ではなく「見當使」にひきつけて読むべきことを指摘しておいたが、これと類似の用法は、嘉承二年十月日東大寺政所下文案（『平安遺文』一六七八号）「若違此旨、有請国検田使所者、且召誠庄民加重料」にも見られる。
- (36) 国使としての実検使ではないが、保安三年三月十一日伊勢国大國莊專当解（『平安遺文』一九六〇号）には実検使が洪水のために破損した大溝の実否調査を沙汰している事例が見られる。
- (37) 表中（No 12）の大和国に一例見えている。史料中より所当地子・官物の勘責に当たっていたことが知られるが、かかる使が個別に存在したかどうかは疑問である。因に勘徴なる語は、天暦元年閏七月十六日付太政官符に「調庸租税、逐年難済、爱国使郡司等、適頼行勘徴、或檢封其宅」（『政事要略』卷五十一）とあることかともわかるように特別の意味を持つものでない。おそらく徴収等の職責に与る者の総称であったのではあるまいか。
- なお、尾張国郡司百姓等解（『平安遺文』三三九号）の第七条に類似の用語が見えている。
- また、その意味では「幹了使」なども以前から存在するもので「有能で強い使」という意の普通名詞であった。
- (38) 「群書類從」卷一三六。
- (39) 森田悌「古代地方行政機構についての一考察」（『歴史学研究』四〇一号）。佐藤宗諄「律令国家の変貌」（『講座日本史』1・所収）。
- (40) 「平安遺文」二七九号。なお、大石氏前掲論文参照のこと。
- (41) 補註（32）（33）の諸論文を参照。
- (42) 「類聚三代格」卷十九。

- (43) 泉谷康夫氏前掲論文。
- (44) 「平安遺文」二四〇号。
- (45) 「平安遺文」五一五号。
- (46) 松岡久人氏前掲論文。
- (47) 「中世初期における国衙権力の構造とその特質」（『日本歴史』三六〇号）。
- (48) 例えば「平安遺文」二五四一号、三三五四号、三八一〇号、三九二七号など。
- (49) 丹生谷哲一「在地刀称の形成と歴史的位置」（『中世社会の成立と展開』所収）。
- (50) 入間田氏前掲論文。
- (51) 坂本氏前掲論文。
- (52) 「平安遺文」七五六号。
- (53) 「平安遺文」二七〇九号。
- (54) 例えば「平安遺文」補七号、補三一号など。
- (55) 入間田氏前掲論文。
- (56) 安元元年閏九月二十三日伊賀国在庁官人解（「平安遺文」三七〇九号）には、東大寺別当顯惠法印が「前司得賛之刻、以<sub>レ</sub>贖<sub>レ</sub>勞<sub>二</sub>構<sub>一</sub>取<sub>レ</sub>收納使補任之庁宣、為<sub>レ</sub>證文<sub>二</sub>掠<sub>レ</sub>領公田出作田官物<sub>一</sub>」したことにより、糾弾されている事実が見えてくるが、ここには收納使の補任が庁宣によってなされていたことも窺え興味をひく。